

実践報告

講義形式授業への当日ブリーフレポート方式導入の試み －授業アンケートの分析からみる教育の効果－

春原 淑雄

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 29 年 11 月 30 日受理)

**Attempt to introduce the brief reporting system on the day to classroom lessons
- The effect of education seen from analysis of class questionnaire -**

Yoshio HARUHARA

(*Nishikyushu University Junior College*)

キーワード：当日ブリーフレポート方式・教授方法・能動的学修・授業評価

【 目的 】

近年、知識の伝達・注入を中心とした従来の大学の授業を、学生が能動的に学修していく場に転換していくことが期待されている。これまで大学の授業といえば、教員から学生へ一方的に知識を伝達する講義型の授業が主流であり、学生は教員からただ知識を受身的に拝聴する受動的な学習者であった¹⁾。しかし、中教審答申²⁾に示されるように、学習者が単に授業を聞いているだけではなく、聞く以上の活動を行い、その活動に能動的にかかわり、活動内容についてよく考えて行く仕掛けを教員が行うこと、すなわち学生の能動的な学修を実現できる授業展開を大学に強く求めている。こうした現状に対して、多くの大学ではFDの1つとして授業改善が取り上げられ、学生の能動的な学修を促す教育方法の導入が進められている。

座学中心の従来型講義において、学生の能動性を高める授業方法の1つに、当日ブリーフレポート方式（Brief Report of the Day：以下BRD方式）がある³⁾。BRD方式の授業は、講義の当日（時間内）に、受講生に小レポートの執筆と提出という具体的な目標設定をし、①テーマの確認、②構想を練る、③情報収集をする、④執筆する、という4つの手順に沿って授業を進めていく（表1）。BRD方式の授業のねらいとして、①課題明示、②個別化、③双方向性、④私語の抑制効果、⑤出席の促進効果、⑥ブロック化、⑦文章力の養成、⑧実用化、の8つがあげられている（表2）。

表1 BRD方式の基本手順

①テーマの確認
教員はBRD方式の実施を宣言し、テーマと執筆時間を板書する。
②構想段階
用紙を配布し、10分～20分間程度の考慮・構想時間を与える。
③情報収集段階
受講生が互いの構想を知る機会を設ける。教員は発問し、必要な情報を引き出すよう努める。また通常の講義と同じように説明を行う。
④執筆段階
受講生はレポートを執筆する。教員はこの間、机間巡視をし、質問があれば個別に回答する。書けた人から直接教員に手渡し、退室する。

注) 文献3)をもとに筆者が作成

表2 BRD方式のねらい

①課題明示：講義の目標を明確化し、課題としてより具体的に示す。
②個別化：一斉指導の中に個別学習の要素を位置づける。
③双方向性：学生の声を汲み上げて授業に反映する。
④私語の抑制効果：説明時における情報の伝達を円滑にする。
⑤出席の促進効果：当日の授業に出席する必要性を生み出す。
⑥ブロック化：授業時間の90分を分節化して変化をつける。
⑦文章力の育成：限られた時間で一定量の文章をまとめる。
⑧実用性：いつでも誰でもどこでも手軽に使える

注) 文献3)をもとに筆者が作成

BRD方式を従来型の講義形式の授業に導入することで、学生はただ教員の話を受け身で聞いているだけでは済まなくなる。授業内でのレポートの完成・提出という具体的な目標に向けて、構想を練る、他の学生の構想を知る、教員の説明を聞く、レポートを執筆するといった多様な活動に能動的に参加しなければならない。その結果、学生の授業に対する集中度が高まり、授業の理解度や満足度が上がるとともに、私語の少ない状態になることが明らかにされている⁴⁾。

本研究では、学生の能動的な学修を促す教育方法としてBRD方式に着目し、短期大学1年生が受講する講義形式の授業にBRD方式を導入した。BRD方式による授業の感想、満足度および集中度など、受講学生に授業評価アンケートを実施し、従来の講義形式との比較をとおして、BRD方式の教育効果について検討することを目的とする。

【 方法 】

1. 調査対象者

保育者養成系の短期大学に在籍する1年生90名。いずれも講義形式の専門教育科目の受講者である。

2. 対象授業の概要と進め方

BRD方式の導入の対象となった授業では、全15回の講義のうち13回、BRD方式の授業をおこなった。初回のガイダンスにおいて、BRD方式の特徴や効果、授業の進め方、毎回の小レポートの結果が成績評価に反映されることなどを十分説明をしたうえで、BRD方式による授業を開始した。なお、学生が執筆した小レポートは教員が添削し、次の授業で学生に返却した。その際、よく書けている学生のレポートを解答例として配布し、執筆のポイントや総評を述べるようにした。

3. 調査手続き

15回目の授業終了時に、無記名・集合方式にてアンケート調査をおこなった。調査の実施に先立ち、調査結果は本研究ならびに授業改善以外には使用しないこと、アンケートに回答しなくても成績や指導において不利益にならないことを口頭で説明し、アンケートの提出をもって同意とみなした。

4. 調査内容

調査内容は、①BRD方式授業の感想に関する16項目、②BRD方式授業の満足度及び集中度、③BRD方式と従来の講義方式の良否（どちらが良いか）とその理由であった。①と②の質問については、「普通の講義方式（90分間教員による説明が続く方式）の授業とくらべた場合」と教示し、従来型の講義方式と比較して、回答してもらった。

【 結果と考察 】

1. BRD 方式の感想

16 項目の回答の平均値を図 1 に示す。平均値の高かった項目は、「構想や執筆など授業に変化がある」「期末テストだけ成績が決まらないので安心である」「丸暗記におちいらないのでよい」「毎回授業の目標（テーマ）が明確である」「書く機会が多いので、文章の練習になる」「書くことで知識が定着する」などであった。

BRD 方式を導入することで、従来の講義方式にみられる平板な授業展開を、①テーマの確認、②構想を練る、③情報収集をする、④執筆する、の 4 つの段階にブロック化し変化をつけることができる。これにより、学生は、教員の話聞くだけの受身的な存在ではいられなくなる。構想を練る段階では、テーマについて自分なりに考えたり、テキストを読んだりすることをおして、テーマに関して自分の知識の曖昧さに気づき、知りたいという動機づけを高める。さらに続く、情報の収集ならびにレポート執筆という一連の段階を経ることで、従来型の講義よりも知識の定着・理解が高まると評価している。本研究の結果は、これまでの BRD 方式に関する研究知見を支持するものである^{5) 6)}。

一方、平均値の低かった項目は、「大学の授業らしくない」「レポートを書く時間が足りない」「説明時間が比較的少ないので分かりにくい」などであった。BRD 方式による授業は、学生がイメージするいわゆる大学らしい講義とは異なる印象を与えるようである。また、BRD 方式の授業進行に関して、情報収集段階での教員による説明量、執筆段階での執筆時間に関して、さほど否定的な評価はしていないようである。

2. 授業での満足度と集中度

授業での満足度の評定結果（人数）を図 2 に示す。満足度について、「どちらともいえない」との回答が 50.0% で最も多かった。満足度が「非常に高い」が 4.4%、「やや高い」が 30.0% であり、両者の回答を合わせると 34.4% であった。一方、満足度が「非常に低い」が 3.3%、「やや低い」が 12.2% であり、両者の回答を合わせた結果は 15.6% であった。

「どちらともいえない」との回答が最も多かったものの、満足度が高い（「非常に高い」「やや高い」）との回答は、満足度が低い（「非常に低い」「やや低い」）との回答よりも多かった。従来の講義形式とくらべた場合、BRD 方式による授業の満足度はやや高い傾向にあるといえる。

授業の集中度の評定結果（人数）を図 3 に示す。集中度について、「やや高い」が最も多く、60.0% の回答があった。集中度が「非常に高い」（13.3%）と「やや高い」の両者の回答を合わせると、77.3% であった。一方、集中

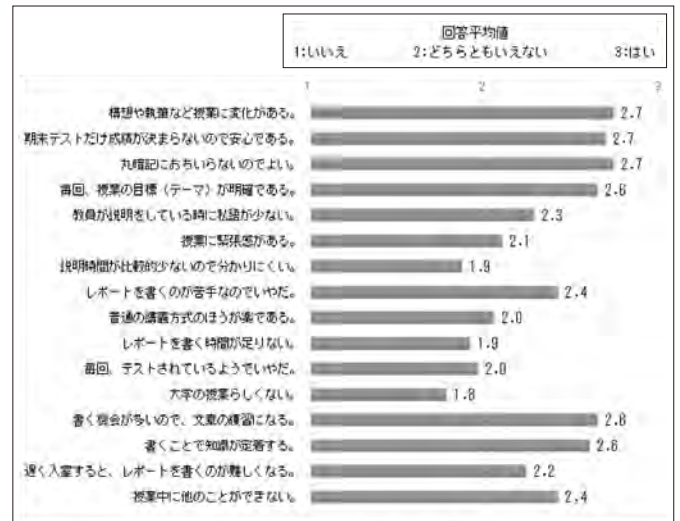


図1 BRD 方式の感想項目別の平均値

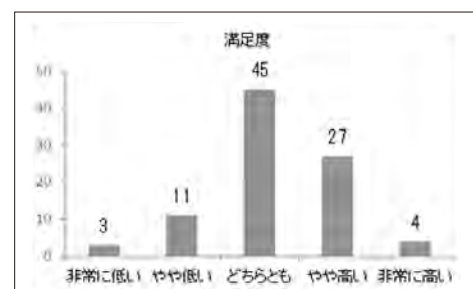


図2 BRD 方式の満足度

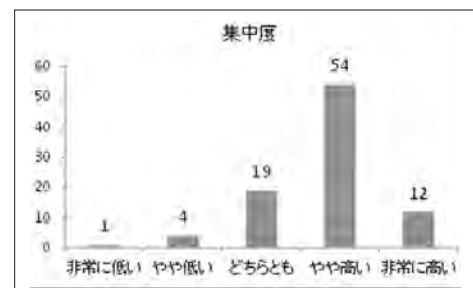


図3 BRD 方式の集中度

度が「非常に低い」が 1.1%、「やや低い」が 4.4% であり、両者の回答を合わせた結果は 5.5% であった。

この結果は、BRD 方式による授業は、講義方式の授業にくらべて、学生の授業に対する集中を高めることを示している。

3. BRD 方式と従来型の講義方式の良否

BRD 方式と従来型の講義方式のどちらがよいか、その結果を図 4 に示す。「従来型の講義方式がよい」が 6.8%、「BRD 方式がよい」が 45.5%、「どちらともいえない」が 47.7% であった。

自由記述によると、BRD 方式がよい理由は、「話を聞きながらメモを取りそれをレポートにまとめることで、終わったあとに、やりきった感があるから」、「レポートを書く力もつくので」、「普通の講義だと話を聞かないことも多いが、レポート式だと話を聞こうと思うから」、「毎

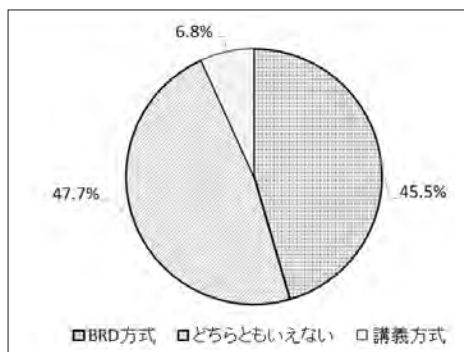


図4 BRD方式と講義方式の良否

回の授業のテーマを最後にまとめることで、その日学んだことをしっかりと理解することができると思うから」、「作業が入るので、眠くならないし、ずっと先生だけが話し続けるのは疲れるから」、「テストがないので良い」などであった。

どちらともいえないという回答の理由は、「当日ブリーフ方式はよいと思うが、書く時間が短すぎるため、十分に執筆できない」「明白にテーマが決まっている分、テーマに沿う内容以外になかなか関心を向ける余裕がない」「レポートを書くのが苦手なのでいやだという気持ちもあるが、レポートを書くことで授業内容の理解はあがると思う」などであった。

従来型の講義方式が良い理由は、「レポートをうまく書くことができないので、いやである」、「当日ブリーフレポートにしても、みんなががんばれるわけではない」などであった。

これらの結果から、BRD方式は、講義方式にくらべて、①授業への学生の参加度が高い(聞くだけではない)、②授業の目的が明確で集中できる、③授業の理解度が上がる、④授業展開に変化がある、⑤テストや評価に不安が少ないことが示唆される。このようにBRD方式は、学生の能動性を引き出し、高い教育効果を持つと考えられる。その一方で、BRD方式は学生のライティング能力に大きく依存するため、ライティング能力があまり高い学生は負担感が大きくなること、また、小レポートのテーマに沿った内容を中心に授業を展開するため、どうしても授業で扱う内容量が少なくなってしまうなどの課題が残されている。

【参考文献】

- 1) 浅野 誠 2002 『授業のワザ一挙公開－大学生き残りを突破する授業づくり』 大月書店
- 2) 中央教育審議会 2012『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』
- 3) 宇田 光 2005『大学講義の改革－BRD方式の提案』 北大路書房
- 4) 中西良史・宇田光 2003 「当日ブリーフレポート（BRD）方式による講義の効果－興味度・理解度・集中度についての実験的検討」 大学教育学会誌 25、pp89-95
- 5) 前掲4)
- 6) 山田悟史 2011 「知識獲得型講義における「当日レポート方式」の導入」 環境と経営 17 (2)、pp51-55